

【研究支援の現場から：大学院研究活動奨励・支援制度 活用事例紹介】

龍谷大学では、本学大学院生のさらなる研究力の向上と、国際的な研究交流の活性化を目的として、各種支援制度を運用しています。このたび、本制度を活用して世界的な国際学会での報告を行い、目覚ましい成果を収められた学生の方にお話を伺いました。本インタビューを通じて、本学における研究支援制度の活用実態とその意義を広く学内外にご紹介いたします。

大学院研究活動奨励・支援制度利用者の声

羽渕 有稀 さん 法学研究科 修士課程 1年

(インタビュー当時)



イスラエル現代政治を「データ」で読み解く。若手研究者の新たな挑戦。

—— 現在の研究テーマと、今回この制度を利用されたきっかけを教えてください。

私は法学研究科で、イスラエルの現代政治を研究しています。具体的には、近年イスラエルで物議を醸している「司法制度改革」をテーマに、世論調査データを統計的に分析する「計量分析」という手法を用いています。中東地域は、世界が交渉ベースで平和を目指す中でも対立が続く特殊な地域です。その中でも、民主主義の自負が強いイスラエル市民が、政府の強権的な政策に対してどのように反応し、分断が起きているのかを明らかにしたいと考えました。

この制度を知ったのは、入学時のオリエンテーションで配布された資料がきっかけです。指導教授の浜中先生からも背中を押していただき、修士1年という早い段階ではありますが、韓国・ソウルで開催される国際政治学会（IPSA）での研究報告を目指し、「学会参加支援」を申請しました。

初めての学会報告が国際舞台。世界から受けた刺激とフィードバック。

—— 実際に国際学会に参加してみて、どのような収穫がありましたか？

実は私、国内の学会よりも先に、いきなりこの国際学会で初めての研究報告を行ったんです（笑）。非常に緊張しましたが、この学会は2年に1度開催される世界最大規模のもので、各国の研究者が集まる貴重な機会でした。

報告では、イスラエル市民が政策そのものの良し悪しよりも、現首相への感情的な共感（聴取）によって政策を評価してしまっている現状をデータで示しました。英語でのディスカッションは先生にサポートいただきましたが、事前に論文を読み込んできてくれた

「討論者（ディスカッサント）」の方々から、今後の研究に直結する具体的なアドバイスやコメントを多数いただくことができました。

自分の研究を客観的に評価してもらい、改良のヒントを得られたことは、修士論文、そしてその先の博士課程を見据える上で大きな自信となりました。

経済的支援が「研究の質」を向上させ、将来のキャリアを支える。

—— この支援制度は、青木さんにとってどのような意味がありましたか？

大学院での研究は、特に私のように自分で世論調査を行う場合、デザインの構築から調査会社の選定、倫理審査まで半年以上の時間がかかります。さらに国際学会への参加には渡航費等の大きな費用負担が伴います。

この制度による支援があることで、費用の心配をせずに「まずは世界に挑戦してみよう」という一歩を踏み出すことができました。また、こうした学会での報告実績は、将来「日本学術振興会」の特別研究員などを目指す際の重要な「業績」にもなります。研究者としてのキャリアを形成する上で、非常に心強いバックアップだと感じています。

学部生へのメッセージ

大学卒業後、すぐに就職せずに大学院へ進むことには、勇気やリスクも伴うかもしれません。しかし、学部時代の2年間だけでは、本当に面白いと思ったテーマを深めるには時間が足りないこともあります。

龍谷大学には、こうして意欲的な研究活動を支えてくれる環境が整っています。もし「もっとこれを突き詰めたい」という情熱があるなら、ぜひこの制度を活用して、広い世界に飛び込んでみてください。

編集後記

羽渕さんが利用された「学会活動支援」以外にも、本制度では国内外での調査活動や研究資材の購入など、院生の多様な研究活動をサポートしています。

関連リンク：

- [\[大学院研究活動奨励・支援制度の詳細はこちら\]](#)
-